

# 江戸期佛教の様相1（序にかえて）

原 隆 政

はじめに

現代の「密教」からの視座として時間的距離を鑒み、その温故知新的な範を求めようとした場合、古代から近代、あるいは現代に射程の幅が有る。この認識の下、近代という日本文化の大変革期をトリガーとして日本の密教あるいは仏教は変容したことも事実である。このトリガー以降に時代の波に翻弄され、数回に渡る二〇世紀的特徴の戦争を経て現代の現在に至る。佛教の原初的体系を求めるといふ好奇心ではなく、大変革期以前の佛教がどのような様相を呈していたかといふ好奇心に基づいてかかる論題を提示し、現代との差異を説明していくものである。またさらにその差異が温故知新としての果をもたらすならば、現代の密教にも何らかの示唆を与えるかもしれない。

江戸期は、比較的外国文化に翻弄される機会が少なかった時期であり、日本人の種々なる方法が創出され、熟成された。いわば、この時期に日本人の体型、体質、嗜好、生理に程よく適ったものが存在したと想像に難くない。

い。とりわけ、本というメディアが飛躍的に増殖した背景には、江戸期初期の出版業を支えてきた学者・僧侶、ならびに識字率を高めた教育、その教育（のみならず他の文化）を支えた経済的好景などがあつた。この出版業をとりまく諸々の関係者の造り為してきた文化の一部に僧侶があり、その僧侶が講筵を開いて理解のできる聴衆がいた。講筵と出版という物理的な背景の一つに佛教があつたとも言えよう。つまり佛教が主導的に関係者や各産業をまきこんできたのではなくて、分業化された人間営為の中に程よく合致するように佛教が存在したという認識を措定するわけである。そうしたときに、僧侶は他の業種の人々と交流を持ち、佛教という出家原理を持ちつつも世間との交流を大切にしてきたことは少なかつた。

動ば、唯我独尊的な佛教原理が独り歩きし、権威を大いに持つとすれば、それは既に述べたような「現実」あるいは具体的な場面を捨象する傾向になりはしないだろうか。また僧侶自体の自己疎外に陥らないだろうか。かかる視点を以て以下論を進めていく。

### 一、江戸（初期）という時代

江戸期の諸相を描写するに、様々な資料が存在し、描く角度も幾種もあるはずであるが、ここでは「政府の体制・文化・庶民」という三点から素描を試みた。またこのような総論的な視点だけではなく各論的な視点からもかかる描写は有効であると考え、これは「二、体制に即応すべき佛教（浄教の場合）」で論じることにした。おなじ日本という地理的な条件に居ながらも今から四〇〇年前のことがイメージとしておぼろげであることは否めないがそのイメージを少しでも明確に把握することが肝要である。また都市生成論において現代の解剖学者<sup>〔1〕</sup>からユニークな視点が設けられており、これも現代と江戸期との差異を語る上で有効であると考え。

また、江戸期は体制的な視座を取り払えば、庶民文化・町民文化が花開く時期であったと考える。果して仏教がそのような文化とどのようにして接していたのか。従って、庶民の嗜好がいろいろな展開を経て社会に昇華されていくわけであり、一つの筒を覗くと際限なく広がる万華鏡のような様相を持つ故、この時代の諸相は庶民文化からの視座も一つの方法であると考ええる。

(一) 体制

江戸幕府の成立を起点とすれば一六〇三年から江戸時代の始まり、一八六七の大政奉還によって終る二六五年間の期間があった。その期間をここでは便宜上第一期一六〇三―第二期一七一六(享保の改革)―第三期一七八七(寛政の改革)―四期一八四一(天保の改革)―と分けることにし、本稿では第一期を主な範疇としながらも俯瞰的な視座を以て江戸時代を臨む。この分類は別の見方をすれば第一期で興隆した幕府が、三大改革を行いながらも衰微していく時間系列でもある。幕府の体制の一部を補佐するが如く寺院は寺請制度(一六六一―七三頃法制化)を担い、また一方寺社奉行(一六三五年設置)によって管理された。また、執政の地が江戸という地域に成ったことから、関西文化の大勢がこの第一期においてまだ見られる。特に出版業は関西の地において盛んであったことは各書誌データによってあきらかである。

又、体制からの要請としては学問仏教を強いられ、信仰を中心にした仏教は、政策上、歓迎されることはなかった。唯、政治家の個人的な意向で寺院が保護されたり建立されたりすることは為政者の特権として有った。

## (二) 文化

執政の地と文化の地との一致がこの初期の段階ではだんだんに整理形成されていき、その象徴たる江戸城築城の天守閣、城下町のデザインが約半世紀に亘った。しかし、明暦の大火（一六五七）によって当初予定の豪華なデザインは変更を余儀なくさせられ、そのコンセプトも見直しがあつた。つまり、火災への予防と質素なデザインが要求された。このことは、明暦の大火以前の派手な江戸生成コンセプトをくじき、比較的江戸文化のトーンがやわらいだ感があつた。これによって、特に寺院にあつては、外郭外（例 吉祥寺・水道橋↓駒込、靈巖寺・靈巖島↓深川）へ移された。また朱子学の林羅山（道春）一五八三〜一六五七<sup>2</sup>は、漢籍の多くに道春点を付し刊行し出版業に影響を与えたばかりか、日本語に対しても業績を残した。また、彼は幕府の侍講となり儒教的な素養を幕府に与えた。

文学、演劇（歌舞伎）、国学、美術などはその量を元禄期以降から増やすが、儒教に関しては江戸期初頭からその量は一定であり、幕府との結びつきの強さの安定を示していると言つてよいだろう。この傾向を示すものとして第四代將軍家綱のころの文治政治があり、第五代將軍綱吉に至つては、この儒教に仏教を加え権力支配・統制というよりも道徳によって人民を支配しようとした。又、文化の形態が幾様に変化していく中で、その担い手がリタクシオンされていく。すなわち、公家から豪商へ、豪商から町人へと変化していった。

## (三) 庶民

階級別では士・農・工商でおよそ一・八・一<sup>3</sup>となり、第一次産業に携わる人口比は圧倒的に高い。人口三〇〇〇万人と言われる中、お蔭参り即ちお伊勢参りは五〇〇万人の規模をおよそ半世紀毎のサイクルで瞬間的に誇つ

た。ちなみに浄厳の結縁灌頂は九万人という記録があるが、このお蔭参りには及ばない。また、見せ物の興行も広く行われ、その中には佛教を見せ物にした興行(細工芸)<sup>(4)</sup>もあつたことから、佛教そのものの庶民への共通理解・浸透の度合いを知ることができる。特に野菜を以て涅槃図を描いたり、魚の干物で作つた仏像などもあつた。識字率の向上によつてメディアが有効となり本の出版も当然のことながら増加すること著しかった。

## 二、体制に即応すべき佛教と浄厳の場合

浄厳一六三九—一七〇二<sup>(5)</sup>は、関西に生誕し、高野山において修行する中、同僚に二回程命を狙われて高野山を離れた後、悉曇を極め、密軌を集成し新安流を作るともにかかる密軌を印刷し、口伝の方法よりも事相伝授効率を高め、戒律運動をし、ひいては密教の興隆に大きく貢献した。これは後世の慈雲の則となつた。そして柳沢吉保の手引きで五十代で將軍に謁見し一六九一年十二月に宝林山大悲心院靈雲寺<sup>(6)</sup>を開山するに至り、初代住職となつた。およそ十年後に没するまで結縁灌頂に九万人を導いた。また生涯に亘つて多くの書物を書写し、多くの著作を残したことも偉大な業績の一つである。

### (一) 体制から要求された佛教

徳川家康の政策により、佛教に対しては学問が奨励された。言わば信仰よりも学問に重点を置く佛教は為政者としては管理がしやすい。また、寺請制度も手伝つて寺院は体制の所望するところでの活動が許された。かかる浄厳に与えられた寺院は無論墓地はなく、將軍の武運長久の祈願寺として始り、また学問寺として現在に至り、浄厳の墓地でさえその境内にはない。良くも悪くも佛教学に重点が置かれる佛教であつた。

## (二) 鉄眼版

あるいは黄檗版とも言う。鉄眼道光によって宇治の黄檗山万福寺において寛文九年一六六九から天和一年一六八一の十三年間に印刷された。一六一八部・七三三四卷。これは明版藏経と同じ内容であり、普及版としての經本となった。ここに密軌もあわせて印刷された。宝永年間に忍激が、高麗本と三回対校し、天保年間にこの鉄眼版の乱脱を補うべく順芸によって校訂が行われた。奇しくも江戸期の佛教学論争にはこの初期の鉄眼版などが共通資料として用いられ、かかる時期の仏教学論文にも鉄眼版の乱脱に伴ったと思われる誤りが散見できる。

## (三) 講筵

多くの講筵を開いてきた浄嚴にとつて人生の岐路となつたある講筵は、『妙法蓮華経』「觀世音菩薩普門品」の講説を將軍綱吉にしたことであり、これをキッカケとして靈雲寺の建立にたどり着く。江戸の地は人口一〇〇万に達したと言われる大都市であり、この地において講筵を開くことは興行としても大きな意味を持ったであろう。鉄眼や鳳潭などもこの大都市で原資を貯えて次のステップを踏むということは、この時代の定石であると考え思われる。

## (四) 本という(マス)メディア

道春点が大きくその影響を与える中、漢文の読み下しは日本独特の敬語表現が組み込まれていき、恐らくはその感化を仏教学も受けたに相違ない。この時期の本は板本が中心になりつつ、印刷がその技術となつて木版・活版が栄えた。ただ、その両者の経済的な有用性の是非は時代と共に活版は少なくなり木版が増える中、当然佛教

書籍は木版が多く、再版を視野に容れていたものと思われる。これは初版のミスを残しやすすい欠点があるが、黒塗りして加除訂正をするのもたまに見られる。また、紙の価格もその出版業に影響してくるが、基本的には印字をしやすしい漉き具合の品を用いている。山東京伝の頃から原稿料が発生してくるが、それまでは著者を別の仕方、食事の接待などの方法をもって養っていた。およそ出版業に関しては学問的な関係者によってその運営が継続できた感があり、識字率の上昇によって庶民がその出版産業を伸ばすことに至った。現在、浄嚴の著作は翻刻されていたり、板本になっていたりするが、また直筆らしきもの(手紙の類い)が現存する。しかし、浄嚴のこのメディア用いる主たる意図は、口伝なども含めた密軌の印刷であり、この印刷の目的は正確な事相の伝達であった。この業績によって密教も隆盛していく。併せて新安流の学問的成果も大きく作用していることは論を俟たない。

(五) 庶民との交流

特に、浄嚴の場合に限っては結縁灌頂という人生後半の出来事で庶民の交流があり即ち、湯島の靈雲寺では九万人の信者を集めるに至った。また、この庶民との交流に関しては智山伝法院内で行ったグループ研究<sup>8)</sup>において庶民と僧侶との交流の諸相を考察した結果得られた結論があり、これはおそらくは時代を超えた普遍的な両者の在り方ではないか考えられる。たとえば、この武運長久祈願の寺で庶民の願いは、武運長久であるとは考えにくく、むしろ結縁灌頂という形で仏菩薩などとの縁を願ったものであることは容易に想像がつくのである。

まとめ

佛教が、日本に根を下ろして千年近くの歴史を背景に江戸期佛教は始まる。その中で信仰を取り上げれば、民

衆のお伊勢参りが圧倒的に盛んであり、また大山参りも有名であった。浄厳の周辺事情を鑿るに結縁灌頂が九万人もの入壇者を招いた。およそこの傾向を総括するに庶民において「詣でる」という集団的な参拜方式が認められる。つまり、信仰の場所へ直接行くことで庶民生活の一部として意味付けられる。庶民は詣でることと併わせて言わずもがなの遊山とを対にしていたものと容易に推測できる。神社仏閣の参道には経典や法衣が誠しやかに売られることは現代でも少なくむしろ信仰の対象とは関係の無い玩具・嗜好品に匹敵するものが売られているのがほとんどである。これが庶民の信仰の形であったと推定できる。また庶民とは反対の為政者クラスではその願掛けを大いに佛教に期待し、寺院の建立をしたのは綱吉・浄厳の例でも明らかである。また、家康の様に学問的な嗜好の一部を佛教に求め、学問佛教（体制に反発しない佛教）が結果的に江戸期には栄えた。一方僧侶側の一部は世間と足並みを合わせることを同時に学んだことは、出版産業との連携、富くじ、金貸し業を営む寺院の有り様から、解るであろう。

よって、江戸の佛教の諸相の一つとして学問佛教、世俗化した佛教の両者が存在しておりそれらが世間と調和した社会形成に有機的に貢献していたと見て良いだろう。ただここで欠落している視点は、佛教本来の独自性を高揚した戒律運動や外部からの佛教批判という精神的な視点である。この点に関しては他日の論考に譲り、順次江戸期佛教の諸相に迫る次第である。



註

(1)

解剖学者・養老猛の弟子で布施英利等が展開する一つの主張として、現代の都市には死体が無いと言う。これは都市という空間の結構の原理には大脳新皮質であつてこの部位の思惑に翻弄されると人間は疎外されるという。

(2)

林羅山(道春)・一六〇五に幕府に登用される。君臣の道を説く儒学思想を執政の場に適應させるべく、その地位が確固たるものとしてあつた。また、格好は僧形であつてもその思想は佛教を排斥する傾向を持ち、為政者側として、その系列は水戸学に求めることができよう。幕府としては、一方に儒学、もう一方に仏教学があり、両者は思想的に交流することはなかつた。江戸初期文化の分類、関西を拠点とする寛永文化という範疇に属す。

(3)

人口比の資料・山川出版社「日本総合図録」増補版二〇〇〇年

(4)

見せ物・川添裕著「江戸の見せ物」岩波新書881。このように佛教の見世物を認識するということは庶民にも仏教的ななじみがあつたことを裏付けるもので、これが全国的に共通認識としてなければ、かかる茶番が成り立つことはない。

(5)

浄厳  
・浄厳の経(略)歴  
河内国錦部郡鬼住村の人。上田氏。字は覚彦。初めの名は

雲農また、妙極堂、瑞雲道人、虚斎、無等子などがある。

一六三九年 明正(女)天皇 寛永十六年十一月生まれ

一六四八年 後光明天皇 慶安元年高野山に登り、悉地院の雲雪に師事し、剃度す。十歳

一六五五年 後西天皇 明暦元年南院の良意に就く

一六五六年 後西天皇 明暦二年金剛山法相院の長快に従つて伝法灌頂を受ける

一六六四年 霊元天皇 寛文四年良意より安祥寺流を受ける

一六六七年 霊元天皇 寛文七年伝法灌頂を朝遍より受ける

一六七〇年 霊元天皇 寛文十年高野山に即身義を講義ける

一六七二年 霊元天皇 寛文十二年春、観心寺に如晦庵を設け、諸論を講ずる

一六七三年 霊元天皇 延宝元年菩薩戒を受ける鉄眼と邂逅す

一六六九年 寛文九年一六八一年天和元年に黄檗版大藏経を印刷する

一六七五年 霊元天皇 延宝三年七月、孝源の命により、鳴瀧般若寺を中興、高山寺を創建。

一六七六年 霊元天皇 延宝四年二月、常楽寺に曼荼羅を建立、受明灌頂を弟子に授ける。五月、高山寺に具足戒を受く。

- 一六七七年 靈元天皇 延宝五年・五月、道雲（実父）の誓状を得て郷里に延命寺を建てる。
- 一六七八年 靈元天皇 延宝六年・二月、延命寺に真言律の本所とし、灌頂壇を開く。
- 一六七九年 靈元天皇 延宝七年・冬、教興寺を営構す
- 一六八〇年 靈元天皇 延宝八年・頼重の要請により、『法華秘略要鈔』十二巻を著す。
- 一六八一年 靈元天皇 天和元年・摂津の諸寺を遊歴して諸論を講ず。
- 一六八三年 靈元天皇 天和三年・春、讃州高松の聴徳案菴、正覚院に灌頂壇を開く
- 一六八四年 靈元天皇 貞亨元年・弘法大師八五〇年御遠忌にあたり、教興寺に祖堂を建立し大曼荼羅供を修す。
- 一六八六年 靈元天皇 貞亨三年・穴八幡法生寺に曼荼羅壇を建てる、受者一三〇〇〇人に達す
- 一六八八年 東山天皇 元禄二年・四月、教興寺大殿を修繕、洪鐘・経蔵を建造。
- 一六八九年 東山天皇 元禄二年・二月、谷中の多宝院で法華経を講ずるに、学徒雲集す。柳沢吉保（側用人）に重んぜられ、靈岸島別業の地に瑞雲菴で住せしめられる。
- 一六九一年 東山天皇 元禄四年・綱吉に重んぜられ、八

月、幕府によって靈雲寺を造建す。

一六九四年 東山天皇元禄七年・六月、関八州如法真言宗 総統職となる。

一六九七年 元禄十年・閏二月、靈雲寺にて結縁灌頂を開き、九万人の受者をかぞえる。爾來、隔年に修す。（自叙するまでに一六九九年・一七〇一年の二回は行ったことになる）

一七〇二年 元禄十五年・六月二十七日、寂す。六四歳。  
・浄蔽の周辺（フイールドワークの実績）

（一）人脈

縁戚・父母・兄弟・子供など

師匠・南院の良意、金剛山法相院の長快、孝源、父道雲

国家・綱吉

庇護者・柳沢吉保

帰依者・灌頂受者

同僚・鉄眼

友人・理観（南山）という旧友・

競合・頼周一音

（二）新たな法流

・新安流の形成と本宗とのかわり方

・浄蔽の靈雲寺の結縁灌頂

・壇者九万人とは伝えられている。

また、幕府の命によって建立された靈雲寺を盛り上げる意

(6) 味で多数の多様な手段で入壇者を募ったものとも推測できる。また、入壇者はいくら奉納したのか、未詳である。

(7) 宝林山大悲心院靈雲寺・湯島切通の南側に位置する。建立と同時に作成されたという梵鐘は本道右側の屋外に置いてあり、碑文がある。また台座五個所あり、この梵鐘は五方から撞けるようになっていて。言うまでもなくこの五は五智であり、それぞれの台座に種子が刻まれている。ただ、この梵鐘は日常撞かれた様子もなく、五梵字の摩耗は認められない。この寺院には墓地は無く、浄厳は池ノ端妙極院の墓所に埋葬されている。

(8) 密軌の印刷・口伝であった密軌を印刷することに対して反対勢力があつた。

(9) グループ研究…これは「密教の利益(功德)」というテーマの下に考究したものであり、二〇〇一年度の全体会で宗学研究室内所員の各論をまとめ、筆者が発表した原稿がある。

〈キーワード〉江戸、佛教、出版、鉄眼

The first part of the book is devoted to a general history of the United States from the discovery of the continent to the present time. It is divided into three volumes, each of which contains a complete and accurate history of the country from the beginning to the end of the reign of the Emperor of the East Indies.

The second part of the book is devoted to a general history of the United States from the discovery of the continent to the present time. It is divided into three volumes, each of which contains a complete and accurate history of the country from the beginning to the end of the reign of the Emperor of the East Indies.

The third part of the book is devoted to a general history of the United States from the discovery of the continent to the present time. It is divided into three volumes, each of which contains a complete and accurate history of the country from the beginning to the end of the reign of the Emperor of the East Indies.

The fourth part of the book is devoted to a general history of the United States from the discovery of the continent to the present time. It is divided into three volumes, each of which contains a complete and accurate history of the country from the beginning to the end of the reign of the Emperor of the East Indies.

The fifth part of the book is devoted to a general history of the United States from the discovery of the continent to the present time. It is divided into three volumes, each of which contains a complete and accurate history of the country from the beginning to the end of the reign of the Emperor of the East Indies.

The sixth part of the book is devoted to a general history of the United States from the discovery of the continent to the present time. It is divided into three volumes, each of which contains a complete and accurate history of the country from the beginning to the end of the reign of the Emperor of the East Indies.

The seventh part of the book is devoted to a general history of the United States from the discovery of the continent to the present time. It is divided into three volumes, each of which contains a complete and accurate history of the country from the beginning to the end of the reign of the Emperor of the East Indies.

The eighth part of the book is devoted to a general history of the United States from the discovery of the continent to the present time. It is divided into three volumes, each of which contains a complete and accurate history of the country from the beginning to the end of the reign of the Emperor of the East Indies.

The ninth part of the book is devoted to a general history of the United States from the discovery of the continent to the present time. It is divided into three volumes, each of which contains a complete and accurate history of the country from the beginning to the end of the reign of the Emperor of the East Indies.

The tenth part of the book is devoted to a general history of the United States from the discovery of the continent to the present time. It is divided into three volumes, each of which contains a complete and accurate history of the country from the beginning to the end of the reign of the Emperor of the East Indies.